

# 231-pm01

名古屋市立大学薬学部の製剤学実習における味覚センサー導入の試み～第8報～  
○尾関 哲也<sup>1</sup>, 竹内 堂朗<sup>2</sup>, 梶屋 昌史<sup>1</sup>, 中村 和哉<sup>1</sup>, 鯉江 真帆<sup>1</sup>, 林 直美<sup>1</sup>,  
田上 辰秋<sup>1</sup>, 川上 智子<sup>3</sup>, 池崎 秀和<sup>3</sup> ( <sup>1</sup>名市大院薬, <sup>2</sup>金城学院大薬, <sup>3</sup>インセント )

名古屋市立大学薬学部の製剤学実習において、2011年度から味覚センサーを導入して以来、薬物のもつ苦味について教育を行ってきた。実際の製剤開発において、薬物のもつ強い苦味をマスキングする技術の開発が製薬企業に求められており、苦味がマスキングされていることを定量的かつ客観的に評価するための機械として、味覚センサーは、すでに多くの製薬企業に導入されている。特に、口腔内崩壊錠は、口腔内で速やかに崩壊する剤形であるため、薬物の苦味が出やすく、口腔内崩壊錠の開発に味覚センサーが用いられている。以上の背景より、本学の実習では、学生が口腔内崩壊錠を実際に作製し、製剤試験を行うだけでなく、味覚センサーによる評価項目を設けている。また、口腔内崩壊錠が嚥下機能の低い患者（小児患者・高齢者患者など）を対象にしていることと関連して、近年服薬ゼリーの導入を行い、学生が認識しづらい嚥下機能について理解を深めてもらっている。さらに本年度は、典型的な口腔内崩壊錠として Zydis 錠を用いた。Zydis は、凍結乾燥型の口腔内崩壊錠の製造技術であり、口に含む（水にひたす）と数秒で溶ける優れた口腔内崩壊錠である。異なる製法で作製した口腔内崩壊錠を比較してもらい、その違いについて考察してもらった。実習の最後には、実習項目に関するアンケートを行った。アンケートの結果、学生は、本実習において、高い関心と理解を示していることが確認された。薬学部の学生実習に味覚センサーの評価項目を導入することにより、学生は、実際の薬学教育では学びにくい、薬物の苦味を含めた味覚に関する知識・経験を学ぶことができたと考えている。